



できごと

平成 21 年度の「子ども図書研究室講演会」を 6 月 23 日（火）に開催しました。講師に榊原洋一先生（お茶の水女子大学人間発達教育研究センター教授）をお迎えし、「赤ちゃんの発達と絵本」というテーマでお話を伺いました。

参加者の募集開始と同時に、多数の申込があり、今回のテーマに対する関心の高さが感じられました。

お話は大変高度な内容でしたが、赤ちゃんの発達について時折ユーモアを交えながら、大変分かりやすくお話ししていただきました。参加した方々は熱心に聴講され、質疑応答の時間には質問が相次ぎました。

（裏面にて、概要を紹介します。）

子ども図書研究室のテーマ展示

耐震補強工事のためお休みしています。

イベント情報

静岡県子ども読書フェスティバル

日 時：平成 21 年 8 月 23 日（日）10:00 開場

1 パネルシアター講座

講演：「楽しく広げようおはなしの世界」10:30～

講習：「パネルシアターを作ってみよう」13:30～

*講習会は事前申込が必要です。テキスト・材料費 800 円

2 体験コーナー「手づくりおもちゃで遊ぼう」

3 絵本のお部屋「絵本の展示」

4 お話のお部屋「紙芝居」「ストーリーテリング」等 10:30～14:30

会 場：函南町中央公民館

静岡県田方郡函南町上沢 81 番地

主 催：静岡県読み聞かせネットワーク

参加費：無料

問合せ：静岡県読み聞かせネットワーク 久保田さん

TEL：055-975-2582

新着資料から

知識

『新レインボー

写真でわかることわざ辞典』



学研

2009 年 4 月

「帯に短したすきに長し」「ぬれ手であわ」といった、ことわざや慣用句などについて、写真を用いてそれらの意味をわかりやすく紹介する。

「目白おし」の語源となった、メジロが押し合うようにして枝に止まる様子や、「立つ鳥後をにごさず」の語源となった、水鳥が綺麗なしぶきを立てて飛び立つ様子なども、写真によってイメージできるので、容易に意味を理解できる。

「灯台もと暗し」など、語源が誤解されがちなものも紹介されており、豆知識としても楽しめる。【小学校中学年から】（剣持）

物語

『おなあちゃん

三月十日を忘れない』



多田乃 なおこ / 著

富山房インターナショナル

2009 年 3 月

昭和 20 年 3 月 10 日、東京大空襲の日が 14 歳の誕生日だった女性の手記を元にした作品。

下町で繁盛するもちがし屋の末っ子である主人公は、空襲で焼け出され、もらいものをして生きている女装の男性「おなあちゃん」と共に、小学校の講堂や駅の地下道で過ごす。始めは嫌っていた「おなあちゃん」が、やがて一生心から消せない人となる。ひもじさや衣類の不足など、戦時下の暮らしぶりを、今の子どもたちにも分かりやすく描き、なじみのない言葉には語句解説も。【小学校高学年から】（鈴木由）

平成 21 年度 子ども図書研究室
講演会「赤ちゃんの発達と絵本」 報告

講 師の榊原先生は、現在「NPOブックスタート」の理事も務められています。小児科医として最初の 3 年間は浜松市で勤務し、研鑽を積まれたそうです。講演では、大人と子どもが関わることによって、子どもがどう育つのかを中心に、読み聞かせや絵本に触れることが、子どもの初期の発達にとってどのような意味を持つのかを、お話していただきました。



様 々な実験、研究により、赤ちゃんには世界、人、自分、言語を理解する機能がすでに備わっていることが分かっています。かつて新生児は「タブラ・ラサ（真っ白な板）」とされ、まっさらな状態で生まれ、経験により知識を得、周りの事が分かってくる（後生説）と考えられていましたが、現在では、生まれたときには基本的な脳のプログラムがかなり出来上がっていると考えられています（生得説）。もともと能力が備わっていることが分かる例として、顔の表情などをまねる「新生児模倣」、顔への嗜好、視線への反応などがあります。この能力は、読み聞かせをする時に重要なポイントで、赤ちゃんは読み聞かせなどで自分に対して働きかけがあると、読んでくれる人の顔や絵本を見たりします。このことから、赤ちゃんにはそれに対応する準備が整っていると考えられています。

赤 ちゃんは自分を取り巻く世界や周りの人のことを理解して、社会性を身につけていきます。同じものを親（大人）と子が一緒に見ることを「共同注意」といい、平均で生後 8 か月くらいからできるそうです。視線の先にあるものを一緒に見ることは、他者が何を見ているか、何に関心を持っているかを理解すること、

つまり、他者の気持の理解への第一歩であり、社会性につながる極めて重要なステップだということです。親子で絵本を見たり、読み聞かせたりすることはまさに共同注意です。

他者の気持を理解する機能を「心の理論」といい、人間の社会性の基礎になるものです。他者の識別は 1 歳までにできてしまうのに、他者は自分と考えていることが違う、ということが理解できるのは 4、5 歳になってからだそうです。読み聞かせの際に、年齢によって絵本のストーリーの理解に差があるということを、改めて心に留めておく必要があるでしょう。

赤 ちゃんは 1 歳前後で言葉を発するようになりますが、その前にすでに 50 から 70 くらいの言葉を理解して自分の中にためているそうです。言葉にならない声（クーイングやバブリング）を発している時期でも、言葉の理解は進んでいると考えられます。

読 み聞かせは豊かな言語環境のひとつですが、言葉だけでなく、顔を見て、表情を見て関わってあげると、赤ちゃんはもともと持っている能力で、それらの情報を吸収して成長します。赤ちゃんは積極的に周りの情報を収集する能力を備えた「ロバスト（力強い）」な存在であり、私たちは、その能力を十分に伸ばせるように、環境を整えることが必要だということです。

所蔵資料から

研究書

『ヒトの発達とは何か』

榊原 洋一 / 著

ちくま書房

1995 年 5 月

（閲覧室）



発達の過程で乳幼児が見せる行動を記述しながら、その行動を支える神経機能について解説している。特に、運動発達とことばの発達を中心に書かれている。

（牧田）

* 表紙画像はすべて出版社の許可を得て掲載しています。